

## 大正期における三越児童博覧会の展開

是澤 優子

The Evolution of "Mitsukoshi Child Exposition" in the Taisho Period

Yuko KORESAWA

### はじめに

明治後期から、「子ども」をテーマにした博覧会が日本各地で次々と開催された。それらの先駆けとして各地の児童博覧会を牽引したのが三越呉服店（以下、三越）の児童博覧会である。筆者は明治期の三越児童博覧会を分析し、明治後期に百貨店を舞台に企画された児童博覧会が子どもの生活文化の見直しと子ども用品の改良研究、質的改善を進める契機となったことを明らかにした。<sup>1)</sup>

三越では明治から大正期に、たびたび児童博覧会を開いている。第1回児童博覧会において日常的に子ども用品の改善改良を検討する「児童用品研究会」が組織され、研究会と児童博覧会が深く関わり合いながら展開した。<sup>2)</sup> その流れに乗って、大正期の三越児童博覧会はどういう展開を見せたのだろうか。本稿では、明治期に引き続き大正期に開かれた三越児童博覧会の実態を明らかにしながら、明治後期から大正期にわたって企画された三越児童博覧会（以下、児童博覧会）の意義を考察する。

### 1. 悪条件から生まれた工夫 ―第5回児童博覧会

#### (1)開催趣旨

明治42（1909）年から毎年開催した児童博覧会の好評、明治45（1912）年5月には頒布会「みつこしオモチャ会」を発足するなど、三越は子どもの生活文化の発信基地として着々と地盤を固めていった。しかし、大正2（1913）年に第5回児童博覧会を開催するにあたって、三越には課題があった。建物を工事しているため、例年のようなスペースを博覧会場として使えない。工事を進めるか、児童博覧会を中止するかを選択を迫られた三越は、児童博覧会開催を決断した。

「第五回児童博覧会開会趣旨」<sup>3)</sup>によれば、「わが児童博覧会の開催は、帝都首都に於ける年中行事の一となりて、幾百萬の児童の期待しつつある処、われわれは彼等を失望せしむるに忍びず」。そこで博覧会開催を決め、工事を一部中止して会場を確保し、4月15日から5月31

日まで、三越呉服店特設会場を舞台に「男女児童の必要にして、且つ彼らに善良なる効果を与ふべき物品を一堂に集め、之が進歩と改善」を目的に第5回児童博覧会が開かれた。

## (2)陳列会場の工夫

出品物には、明治の風俗や遊びに関するものが多く、23,538点の出品があった。例年より会場が狭かったため「一大革新を為し、従来博覧会には全く見るを得ざりし斬新にして意義深き一種の陳列法」を試みている。会場面積の狭さから考え付いた陳列方法が、「当歳から三歳、三歳から七歳、七歳からそれ以上」という年齢区分に従って、子ども用品を分類する「年齢別の陳列」方法であった(図1・2:「みつこしタイムス」第11巻第6号, 1913)。このような展示方法によって、対象年齢の子ども用品を一度に広く見ることができるとの利点が生まれた。

博覧会顧問の巖谷小波は、例年の博覧会場設備と同様の設備ができない狭い会場を、いかにして子どもが楽しめるように工夫したかを褒賞授与式で語っている。巖谷の言によれば、例年場内にあった食堂を別の階に置き、会期中は特別なメニューを出す。運動場や庭園が作れないので、その代りに会場の片側に背景を置き広く感じさせ、そこに猿を配置して動物園のような雰囲気演出し、大噴水の代わりに池に金魚を放した。活動写真の上映ができないので、子どもがひとりで覗いてみる玩具の活動写真を用意した。それでも楽しみが少ないので、一週間に一度懸賞問題を出して、それに答えた子どもたちに商品を出すということを試みている。

参考室では時代が明治から大正に変わった機をとらえて、明治時代の出来事を年表に起こし、子どもに関することは朱書きで示すなど趣向を凝らした。加えて、錦絵や玩具を随所に置いて当時の風俗、流行の有様を偲ばせた。参考室の話題は、孝明天皇と明治天皇御幼少時の愛用品の数々、乃木大將が知人の息子に贈った五月幟であった。毎年行っている小学生向け懸賞は、作文の意味を絵であらわす「絵作文」を募集し(図3:「みつこしタイムス」第11巻第3号, 1913)、優秀な作品を休憩室に貼り出した。

「新聞の見たる児童博覧会」<sup>4)</sup>を見ると、「物品配列の順序は例年よりも整然たり」(東京毎日新聞)、「狭いけれど出品物には面白いものが多い」(日本新聞)、「規模こそ稍小さけれ明治年代を記念する為めの参考室は可なり行届いたもので大供も喜ぶ設備がして有る」(東京朝日新聞)など、好印象で紹介されている。会場が狭いながらも好評であったのは、展示の工夫と



図1 年齢別の陳列(出生から3歳まで)



図2 年齢別の陳列(7歳以上)

子どもを楽しませる仕掛けが功を奏し、結果的にマネリズムに陥らずに済んだためと考えられる。

## 2. 近代的な設備と衛生への注目

### 一第7回児童博覧会

大正3（1914）年9月15日、ルネサンス式の建物で、地下1階地上5階の本店新館（日本橋）が完成した。店内には日本初のエスカレーターをはじめとして、エレベーター、スプリンクラー、暖房換気など当時の最新設備が施され、近代百貨店としての形態が整っていた。

第7回児童博覧会は大正4（1915）年3月から5月にわたって日本橋三越で行われた。出品点数は、第5回の23,538点（東京）、第6回の23,376点（大阪）に比べて37,493点と約1.6倍に増えた。会場内に衛生室を設け、富士川、三島、宮島、唐沢がその指導にあたったという。「衛生」への注目はまさにこの時代の重要課題であり、小児の疾病に関する模型、父兄に対する衛生上の注意、児童身体の発育表などの出品物が並んだ衛生参考室は、子どもを健やかに育てるための有益な展示であった。

褒賞授与式では、新渡戸稲造「児童博覧会の利用」、宮島幹之助（医学博士）「小児は国民の基礎なり」、湯浅藤市郎（工学士）「出品物について」が講演した。<sup>5)</sup>

## 3. 児童博覧会の発展 ―「児童用品展覧会」開催

### (1)展示品

大正5（1916）年2月10日から3月25日まで、児童博覧会を発展させた企画として「児童用品展覧会」が開催された。これまでの児童博覧会と同様、子どもの日常に欠かせない児童用品や参考品を展示した。

この展覧会の特色は子ども時代を七つの場面に分け、人形と大小道具でその情景をあらわしたことである。出産から小学生の間の生活について、①出産（産湯に浸かっている場面）②雛祭り（人形飾り祝い膳）、③幼稚園（先生と園児が談笑している場面）、④七五三詣り（祝いを着た子どもが母親に手をひかれお参りする場面）、⑤小学校（廊下を歩く子どもと教室）、⑥こども室（和室に置いた机で勉強する児童とその傍で遊ぶ幼児）、⑦運動会（競技風景）の各場面が会場内に再現されていた（図4：三越100年の記録，2005）。

会場入口付近に乳母車、電気仕掛けの電車と米搗き機械の模型。陳列場には服飾、玩具、運動具、幼稚園用具恩物、学校用品、哺育品、食物など。参考室には玩具や子どもを描いた錦絵、

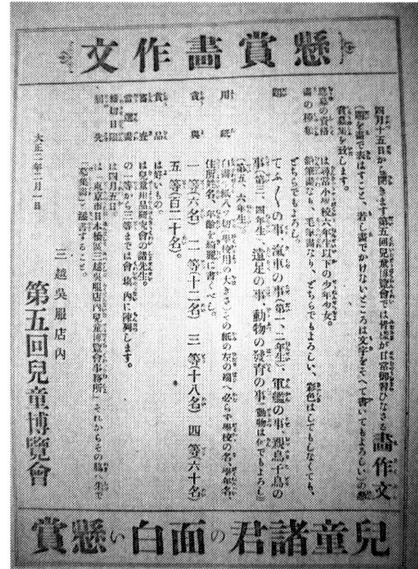


図3 絵作文募集（「みつこしタイムス」第11巻第3号，1913）



図4 七五三詣りの場面（「三越100年の記録」, 2005）

子どもが自分で祭った絵馬、夜泣きを治す大津絵、高野山や鎌倉八幡等の出世の御守り、魔除け。明治維新前後の往来物、小学校教科書、各地の凧などが陳列された。ブリキ玩具（東洋堂）、人形（吉徳商店）、輸出紙製玩具（伊勢辰広瀬商店）など、いろいろな物の制作順序を示した展示にも多くの人が興味を示したという。印刷物製作は、巖谷小波のお伽噺「偽勇士」の原稿、校正、活字、印刷、製本を順序立てて陳列した。

## (2)関連企画

この展覧会に関連して、お伽会と家庭講演会、家庭音楽会が開かれた。第1回目のお伽会（2月13日午後1時半から）のプログラムは、お伽噺（巖谷小波）、手品の記憶術（お伽丸柳一）、山雀の曲芸（松島亀之助）、管弦楽の演奏（三越音楽隊）。第2回お伽会（2月20日）は、お伽噺（岸辺福男）、琵琶演奏（鶴河久信）、少年剣舞（河合鶯蛾社中）、百面相（鶴枝）、独唱（三越音楽隊・田谷、柳田）。第3回（3月25日）にはお伽噺（巖谷小波）、演劇（片岡少年一座）。家庭音楽会の詳細は不明だが3月18日に行われた。

家庭講演会は、2月19日に児童用品研究会の高島平三郎、大江寿美子、唐澤光徳。3月4日は、同研究会の宮島幹之助（医学博士）、新渡戸稲造（農学・法学博士）、坪井玄道が講演をした。<sup>6)</sup>

## 4. 大阪三越の児童博覧会

### (1)第6回児童博覧会

本店の新館工事のため、第6回児童博覧会は大正3（1914）年大阪三越を会場に、4月10日より5月10日まで、豊臣秀吉をメインテーマに据えて開催された。秀吉ゆかりの品や玩具、動植物、覗き活動写真、切り絵、貼り絵などを取り揃え連日盛況であったという。

大阪三越では大正2（1913）年、「大阪こども研究会」を発足させた。在阪の教育者や医者などでメンバーを構成し、東京本店の「児童用品研究会」同様、子どもの生活向上を図るための研究と啓蒙活動に努めた。第6回児童博覧会の出品物審査は、「児童用品研究会」と「大阪こども研究会」が当たった。博覧会前日4月9日には、大阪三越呉服店で児童用品研究会主催の講演会も開かれている。<sup>7)</sup>

### (2)第8回児童博覧会

会場の都合がつかないためしばらく開催を見合わせていた児童博覧会は、大阪三越の新館落成を受けて大正7（1918）年に第8回児童博覧会を大阪三越で開くこととなった。4月1日からの開催を予定していたが、直前に会場が焼失という不慮の事故にあったため、予定を遅らせ4月10日から地下1階、7階・屋上を会場に開催している。1階には「大声発音機」を設置し

て博覧会の案内を自動で流し、子どもたちの応募図画から入選した優秀な作品を陳列した。一階から地下に続く階段に掛けられた海流調査図（大阪毎日新聞社出陳）を見ながら下ると「海の文明室」。そこでは海中の雰囲気を出すために青色電燈を使い薄暗くして、豆電球の目を輝かせるアナゴや蛸など滑稽味のある演出と、多種多様の海洋生物の標本や模型の魚を回遊させ潜水夫が作業している有様を再現し、子どもの興味を惹きつけながら海底と水中に関する科学的知識を提供しようとした。殊に、ドイツの潜航艇模型には常に人垣ができていたという。

7階には全国各地からの出品物を、「衣食住、玩具、学用品、運動遊戯具、その他」に分類して展示した。子どもの作った手工品、懸賞募集の女兒運動服、世界各国の玩具、水雷駆逐艦時津風と巡洋戦艦榛名の模型も陳列していた。また、世界保育習俗写真並びに日本の幼稚園今昔図、大阪こども研究会出品の「あやまてる子供の育て方」十面の絵入り説明、理想の子供室の設計図面を掲げた。同会場で人気を博したのが海に関係する偉人への人気投票であった。<sup>8)</sup>

屋上ベランダには、特設子供食堂が設けられ団子や寿司に舌鼓を打つ子どもたちの姿が見られた。期間中の土曜日・日曜日の午後には、景品付きガス風船を飛ばし、お店付近の路上や屋上に多くの人が集まったという。

## 5. 出品物の多さと停滞する子ども用品改善 一第9回児童博覧会

### (1)開催趣旨と募集陳列品

第8回から3年後、大正10（1911）年に第9回児童博覧会が日本橋三越で開かれた。東京では5年ぶりの児童博覧会であった。「開設趣旨」によれば東京で児童博覧会を中断していた間に「欧州大戦は世界の改造を促し、斯界の進歩も亦誠に驚くべきもの」なので、「今回は特に世界的色彩を帯びしめ、陳列品は悉く時勢に応じて改良進歩せしものを網羅し、更に一層斯界の改善を図らんとす。」と開催趣旨を説明している。

日本橋三越呉服店西館4・5・7階及び東館6階を会場に、大正10（1921）年7月1日から8月9日までの会期であった。募集した陳列品は以下の通りである。<sup>9)</sup>

第一部	玩具類	玩具、遊具、人形、恩物
第二部	運動具類	運動具、子守車、乗物
第三部	服飾類	和洋服、帽子、履物、洋傘、袋物、小間物、化粧品、造花
第四部	学用品類	学校用品、文房具、図書、写真、印刷物、机、椅子、什器、 楽器及び附属品、理科動植物地理歴史機械等の模型及標本、 教育用機械器具
第五部	食料品類	食料品、菓子、滋養品
第六部	衛生用品	衛生材料及模型標本、保育用器具機械

分類項目が整理統合され、衛生という分類視点が加わった。品点数は第8回児童博覧会の約

2倍にあたる57,777点と、かつてないほど多く集まった。出品点数の内訳は、第1部16,570点、第2部1,242点、第3部10,529点、第4部17,078点、第5部9,788点、第6部2,570点であった。しかし、出品数が多い割には「残念ながら改良進歩の著しいものを認めない…期待したほどのものがなく、審査員が聊か失望した」と、第1回児童博覧会から顧問を務める巖谷小波が褒賞授与式で講評している。<sup>10)</sup>

## (2)会場の構成と展示内容

第1会場（西館4階）に服飾品、食料品、衛生品、運動具。第2会場（西館5階）に学用品、玩具、売店。第3会場（東館6階）を児童用品と文房具の売り場にして、人形彩色、玩具、文房具、竹細工筆筒、筆巻、万年筆、木版等の製作実演を行った。第4会場（西館7階）では世界漫遊ジオラマ（世界大戦後の世界形勢）、東宮殿下御渡欧記念写真を展覧した。

第1会場は、海の遊びと山の遊びの背景の前に子どもの人形を置き、夏の博覧会らしい雰囲気を作り、以下のような品々が数多く並べられた。ミルク・飴・ジャム・煎餅・落雁などの食料品。哺乳機・氷嚢・湿布・むつき干し・歯磨きなどの衛生品。海水着・野球・庭球などの道具・三輪車・子守車・シーソー・滑り台。ブランコなどの運動具。クッション・枕・傘・下駄・巾着・和服・洋服・改良服・帽子・靴・髪飾り等の服飾品。この会場では、服装改善に関心が高い状況を受けて、洋服の展示が人々の注意をひいたという。第1会場入り口近くにアメリカの小児室、資生堂の児童用家具一式、第2会場には三越家具意匠部の手による小児室2室が置かれた。<sup>11)</sup>

学用品を展示した第2会場では、図書・鉛筆・筆・インキ・鞆・文房具・計算機・知能検査機・顕微鏡・写真機・模型（日光、箱根等）・楽器類が陳列された。この会場では子どもの生活（朝8時から就寝まで）を模型で示した展示が呼び物となった。「楽しい1日」と題して、次のような12の生活場面——①朝食（午前8時）、②通学（午前9時）、③勉強（午前10時）、④休憩（午前11時）、⑤帰宅（正午）、⑥昼食（午後1時）、⑦お稽古（午後2時）、⑧おやつ（午後3時）、⑨遊戯（午後4時）、⑩休憩（午後5時）、⑪夕食（午後6時）、⑫就眠（午後7時）を、小さな人形を使って再現した。<sup>12)</sup> また玩具は、木製、セルロイド製、ゴム製、ブリキ製など様々な素材のものが陳列されていた。最も人気のあった玩具は、燈火がつき音楽を奏でて動く「電気応用音楽入りの電車」であった。

第3会場では、玩具（木村円満堂）、サンエス万年筆、木版（伊勢辰）などの製作実演が行われ、会場中央にそれらの売店が設けられた。第4会場の世界周遊ジオラマは、「布哇ホノルの夜を通して桑港の朝を経、ナイアガラ瀑布、倫敦ウエストミンスター、バッキンガム宮殿、伯林、巴里、伯牙、ブラッセル、ペトログラード、瑞西、羅馬、ヴェニス、埃及、印度、支那等の光景」<sup>13)</sup>を現し、世界の主な場所を一巡りする趣向を凝らした。東宮殿下の渡欧写真（毎日新聞社出品）が同会場に展示されていたので、写真とジオラマとが相俟って効果的な展示になったという。

## おわりに

大正期の三越児童博覧会は、明治期に試行錯誤して作りあげた児童博覧会の様式を土台に展開した。展示、販売、参考室、食堂、娯楽・遊戯スペースを設けるスタイルは、第1回以来の設営方式である。建物の新築工事などに伴い、大阪・東京と場所を変えて行われた博覧会には、「進歩と発達のための改良改善」という理念が依然として流れ続けていた。

出品物は「児童用品研究会」や「大阪こども研究会」の専門家によって総合的に審査され、優秀なものは博覧会で広く紹介される。「学俗共同」を掲げた三越は、博覧会の成果を生かして「児童用品展覧会」、「みつこしオモチャ会」（頒布会）を行うなど、子どもと親を巻き込んだ催しによって、消費者である彼らに近代的な百貨店のイメージを浸透させ、更なる子ども市場の拡大を推し進めた。

大正期後半には、子どもの衛生や洋服改善に関する品物への関心が高まっている。欧米の生活様式——殊に、洋服や子ども部屋は、明治期の博覧会でも紹介されていたが、大正期には新しいタイプの実用品をさらに数多く紹介している。子どものために有益な品物を、子どもに関心をもつ大人たちに知らせる。それらはすぐさま一般に浸透するには至らないが、最新のものを具体的に見て購入できる百貨店の博覧会は、文化的な生活の方向性を一般に啓蒙し、各種の子ども用品が家庭に浸透する窓口となった。

児童博覧会の中核を担っていた児童研究の専門家「児童用品研究会」のメンバーは、「子どもを楽しませる」ことを意識していたことが、博覧会場の工夫や子ども向けの企画などからうかがえる。趣向を凝らした会場づくり、子どもが使う品々の展示・販売、新しい知識や最新技術を使った出品物、子どもが参加する懸賞募集や会場でのクイズなどの企画が集約された児童博覧会は、子どもたちにとって大きな楽しみと興奮を感じる空間であったことだろう。

近代化に沿って子どもの生活と成長が捉えなおされ、教育と生活文化の向上が謳われる時代にあって、子どもの興味を誘い娯楽を提供した児童博覧会。その意味で、子どもを主役の座に置いた三越の児童博覧会は、流行と文化の発信基地としての百貨店という役割と共に、ごく素朴なテーマパークや博物館の祖形としての役割をも果たしていたと言えよう。

## 註

- 1) 拙稿「明治期における児童博覧会について（2）」、東京家政大学研究紀要第37集 1997  
三越呉服店では学者や知識人をプレーンに「流行会」を作り、ここから様々な企画が生み出された。児童博覧会もそのひとつであり、明治大正期にわたる児童博覧会の中核を担ったのは、児童博覧会審査員が結成した「児童用品研究会」であった。
- 2) 明治42年の第1回児童博覧会から大正4年（第7回）までは毎年、その後は7年（第8回）、10年（第9回）に開催している。第6回、8回は大阪三越での開催となった。大正5年には児童博覧会の発展企画として「児童用品展覧会」を開いている。管見の限りでは、大正10年の児童博覧会以降、三越では大正期に児童博覧会を企画していない。「児童用品研究会」については、拙稿「明治・大正期における子ども用品研究のはじまり—「児童用品研究会」の活動を中心に—」、東京家政大学博物館紀要第12集、2007、を参照されたい。

- 3) 三越. 第3巻第2号. 1913
- 4) 三越. 臨時増刊 第五回児童博覧会記念号. 1913  
時事新報, 読売新聞, 東京朝日新聞, 中央新聞, 都新聞, 東京毎日新聞, 萬朝報, 東京日々新聞, 中外商業, 日本新聞, やまと新聞, 国民新聞, 報知新聞, 少女世界の取材記事が紹介されている。
- 5) 児童研究. 第18巻第11号. 1915
- 6) 演題は, 2月19日: 高島平三郎「子供の叱り方」, 大江寿美子「感謝の生活」, 唐澤光徳「小児の冬の衛生」。3月4日: 宮島幹之助「若き女」, 新渡戸稲造「何故にこどもは宝なるか」, 坪井玄道「運動会」であった。
- 7) 児童研究. 第17巻第9号. 1914  
演題は, 菅原教造「家庭的文明の社会化」, 巖谷小波「童話と玩具」, 高島平三郎「如何にして子供を柔軟ならしむるか」。
- 8) 三越. 第8巻第5号. 1918  
浦島太郎, 桃太郎, 広瀬中佐, ネルソン等の海に因んだ人物の肖像切り抜きを掲げておき, 最も敬愛する一人に切り紙1票を張り付けていく。子どもの張り付けた紙で偉人の肖像が埋まってしまうので, 期間中何度も肖像画を取り換えたという。
- 9) 三越. 第11巻第4号. 1921  
第1回児童博覧会の出品物募集は15項目に亘っていたが, 子どもの生活に関わる品々を整理・分類して系統的に捉えるようになってきている。
- 10) 三越. 第11巻第9号. 1921, p.11
- 11) 三越出店の小児室は, 生活改善の一端を具体的に示すために, 一方を「やや上流向」, もう一方を「平民的」向けに製作した。
- 12) 10) に同じ p.2-3
- 13) 10) に同じ p.16

## 参考文献

- 1) 株式会社三越本社編. 株式会社三越100年の記録. 2005
- 2) 大三越歴史写真帳. 1932
- 3) 吉見俊哉. 博覧会の政治学. 中央公論新社, 1992
- 4) 橋爪紳也. 日本の遊園地. 講談社現代新書, 2000
- 5) 別冊太陽. 日本の博覧会. 平凡社, 1990

## 付記

人名及び引用した文章は, 一部現代仮名遣い, 当用漢字に改めたところがある。